

「アトピー性皮膚炎を持つ中学生の焼身自殺」報道に関して（談話）

2009年9月1日

認定NPO法人アレルギー支援ネットワーク

理事長 須藤 千春

アトピー性皮膚炎をもつ中学生が焼身自殺をするという出来事が報道されました。私たち NPO 法人アレルギー支援ネットワークの中にも大きな衝撃と悲しみが広がっています。

私たちは、アレルギーに関する様々な問題の解決に向けて、患者さんや一般社会に正しい情報を発信し、各地で活動しているアレルギー患者の会を支援する事業を進めています。特に最近、アレルギー児の園・学校生活や給食に携わる保育士・教員・栄養職員の方たちに対して、アレルギーの知識を持っていただくための研修会に力を注いでおり、現在もそのプログラムが進行中です。

今回の出来事に関して、私たちにも新聞などで報道された範囲でしか情報がありません。教育委員会から発表されたように、いじめの存在と自殺の関係、あるいはその原因にアトピー性皮膚炎がどのように関連していたのか、今のところ、推測するしかありません。おそらく、実際には私たちが想像しきれない程の、多くの深刻な出来事があったことでしょう。

しかし、情報が不十分であることを承知の上で、私たち NPO 法人アレルギー支援ネットワークとして何らかのアクションをしなければならないという強い思いを感じています。

それは、この事件が「人ごととは思えない」からです。私たち NPO のスタッフの多くは、重症のアレルギーを持つ子どもの保護者です。そのすべてのメンバーが、アレルギー疾患に対する苦労はもとより、それを周りの人たちに理解してもらえなかった時の辛さと、理解し支えていただいた時の喜びを経験しています。友達からいじめを受けた経験を持つ子どもの保護者もいます。しかし、子どもはいじめを受けていることを、親にも話しません。

自分の子どもですら、「よくぞここまで生きてくれた」と思うことさえあります。ですから、今回の中学生が、「特別な子どもだった」とは思えないのです。

私たちのメンバーには、アレルギーの診療を行っている専門医や、保育士・教師・栄養士を育成する大学の教員、実際に保育や学校現場で働く職員もいます。自分たちが目の前で関わっている子ども達の中にも、深刻な状況に陥って

いる子どもがいるかもしれません。メールや電話で寄せられる相談の中にも、危機的な SOS が寄せられることがしばしばあります。

私たちは、その人たちを本当に支えることができているのだろうか？もし、自殺された子どもや保護者の方が、私たちの門を叩いてくれていたとしたら、私たちに何ができたでしょうか？

今回の事件が、中部地方を中心に活動している私たちの膝元で起きたことだけに、そうした自責の念を持たずにはられません。

大部分のアトピー性皮膚炎は、適切なスキンケアや悪化因子の排除とステロイド外用薬を使用した標準的な治療を行うことで、コントロールすることが可能です。しかし、地道な治療を長年にわたって継続することは、子どもや家族にとって大きな負担ともなります。先行きの見えない焦りから治療を離れてしまい、症状が悪化することもあります。

患者さんが治療効果を実感し、納得できる医療を提供できないのは、医療機関の力不足にも責任があることです。しかし、くじけそうになる子どもの気持ちを支えて、将来に夢をもって治療を継続する力となるのは、家庭や友達、学校といった身近にいる人たちの理解と励ましです。

昨年度、日本学校保健会から「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」が発刊されました。このガイドラインには、現代の医学が示している標準的な治療方針に則って、アレルギーを持つ子ども達に対応するのに必要な知識や対策のポイントが示されています。その中で特に強調されているのは、すべての教職員がアレルギー疾患を理解することと、アレルギーを持つ子どもに関する職員間の情報の共有です。

このガイドラインが発刊されてからまだ2年足らずですが、各地域の学校現場の中で、アレルギー疾患に対する理解と対応が着実に進歩していることを私たちは実感し、歓迎しています。

私たちは、お亡くなりになられた中学生とそこへご家族の皆様へ心よりの哀悼の意を表すとともに、今回のような痛ましい出来事が二度と起きないためにも、学校や保育関係など関係各位と協力しあい、アレルギーを持つ子ども達の未来のために、できる限りの活動を進めていきたいと思っています。